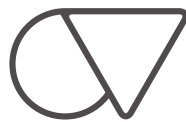


# ギフト

「住宅にはどんな可能性があるか、その時の設計のあり方」について



デザイン  
オツ

築五〇年弱の団地にて。  
仕上げが剥がされてコンクリートがむき出しになった部屋。

墨出しの跡。

木下地の断面。

新しい電設管や塗り足されたモルタル。

幼いころ遊んでいたソフビ。

新潟の海岸で拾った石。

彫刻家の親友からもらった作品。

特製の額。

愛用の六〇年前のレンズ。

ふとしたことから、積層したさまざまな時間や歴史の上にはいまの私が在ることに気づく。

それはわたしにとっての大切なギフト。

いまを生きるわたしには過去にすべてが含まれている。

先人のギフトはいつの間にか、自然に、

勝手に引き継がれていく。

住宅の可能性は、その時間や歴史を垣間

見るための保管庫となることである。

住宅を考えるとときは、施主とたくさんの対話を重ねる。

起こりうる現象、毎日のルーチン、

空間を美しくするための多彩なディ

テール。

それらを造るための設計から職人たちの

エネルギー、そこに至るまでの数多くの

出来事。

全ては良い住宅を作るために贈っていく

ギフトである。

そのギフトの在り方を考えることが、住

宅を造る、ということなのかもしれない。

その想いは施主が住宅を大切にしてい

たいという心につながる。

家族の場合、家族やその子にも伝わる。そうして後に家族構成の変容などで住宅の転換期となったとしても、そのギフトがあれば、その家族の大切に感じることは引き継ぎたいとなるはずだし、引き継がれるべきだ。

住宅街の場合、挨拶を交わして、玄関先でお話しして、お茶を出して…。施主の行いはコミュニティと繋がり、施主はコミュニティと街のギフトを知る。人とコミュニティの関係と、住宅と街のそれは同じこと。コミュニティは住宅に人格をみる。そうして、街から住宅へのギフトがまた生まれる。

なにかを大切にしたいと思う心は美しく、その心を受け継ぐことを誇らしく思っただけ。思っただけ。だから、わたしたちはそのなにかにすぎない熱量と時間をかけて、住宅を造ることを誇れる。



